

氏名	カブラ ギ ヨウ コ	鏑木陽子
学位の種類	博士	(音楽)
学位記番号	博音	第174号
学位授与年月日	平成22年	3月25日
学位論文等題目	〈作品〉ザムエル・シャイト作曲 コラール変奏曲『天にまします我らの父よ』 他 〈論文〉ザムエル・シャイト『タブラトゥラ・ノヴァ』研究 ～その成立背景と鍵盤音楽史における意義～	
論文等審査委員		
(総合主査)	東京芸術大学	教授 (音楽学部) 鈴木雅明
(副査)	〃	〃 ( 〃 ) 大角欣矢
( 〃 )	〃	准教授 ( 〃 ) 廣江理恵
( 〃 )	〃	名誉教授 廣野嗣雄

(論文内容の要旨)

本論文は、17世紀前半のドイツにおいて鍵盤作品の分野で多大な貢献をしたザムエル・シャイト Samuel Scheidt (1587-1654) の鍵盤音楽作品集『タブラトゥラ・ノヴァ Tabulatura Nova』(1624) を研究対象とし、楽曲分析と、当時のドイツにおけるオルガン・タブラチュアのレパートリー調査、さらにはシャイトの音楽に影響を与えたと思われる16世紀の声楽ポリフォニー作品への考証を通じて、『タブラトゥラ・ノヴァ』の成立背景、およびシャイトがドイツの鍵盤音楽史に果たした役割とその意義を、演奏者自身の目を通して再評価しようと試みるものである。

シャイトの鍵盤音楽が「ドイツ音楽芸術の記念碑 (デンクメーラー) Denkmäler deutscher Tonkunst」としてドイツ国内で紹介され、楽譜が出版されたのは1892年のことである。それが『タブラトゥラ・ノヴァ』であった。以来、「シャイトはスウェーリンクの弟子である」、「その優れた対位法とプロテスタント音楽への貢献により、バッハの先達者である」という2つの面を持つシャイト像が打ち立てられ、現在に至っている。シャイト研究の現状および問題点については、第1章の先行研究批判で論じるが、本研究は未だ研究が行き届いていない部分に光を当てようとするものである。

本論文は4章から構成される。第1章では『タブラトゥラ・ノヴァ』のレパートリーを中心に概観するとともに、シャイトの生涯を追い、どのような音楽活動を展開したのかを明らかにする。さらに先行研究批判においては、研究史を概観するとともに、これまでの研究の傾向と問題点、さらには演奏者側の問題にも言及する。第2章では『タブラトゥラ・ノヴァ』成立前後のタブラチュア集のレパートリーを概観する。また日本では知られていないシャイトの自筆譜であるプロッツ・タブラチュア集の内容を紹介する。この研究により、シャイトのオルガンと教会音楽と関わりが明らかになる。第3章ではジャンル別に『タブラトゥラ・ノヴァ』全3巻から5曲を選び、詳しく分析を行なう。第4章ではシャイトが生まれ育った中部ドイツ周辺の音楽家たちに注目し、シャイトの音楽的土台形成に寄与したと思われる人々との関係について考察を行なう。これはスウェーリンクとの関係で語られてきたシャイト研究に対して、新たな視点を示すものである。

本研究を通し『タブラトゥラ・ノヴァ』について明らかになったことは以下の5項目である。

- 1) 中部ドイツの伝統の継承している、
- 2) オルガン演奏に関する知識と技術を伝授している、
- 3) 鍵盤楽器における新しい表現法を追究している、
- 4) 鍵盤作品による対位法・作曲・編曲の教科書

である、5) ドイツ初の典礼用作品の出版譜である

これらの点において、17世紀前半のドイツにあって、シャイトは明らかに革新的なことを為したことは間違いないだろう。

本研究の成果は、まず『タブラトゥラ・ノヴァ』成立前後のドイツにおける鍵盤作品のレパートリーをタブラチュア集からリストアップし、その傾向と特徴をまとめたことにある。これにより17世紀前半の鍵盤音楽のレパートリーが明らかになり、その延長線上に『タブラトゥラ・ノヴァ』が生まれたことが確認できた。また本研究の中核をなすのが第3章で行なった楽曲分析である。これによりシャイトの作品を包括的に見て、その作品の特色と魅力、すぐれた対位法、シャイトが目指そうとしたであろう響きを突き止めることができた。シャイトを育んだのは中部ドイツに脈々と息づく広くて緩やかな伝統の流れである。そこには信仰、神学、讃美歌、音楽理論、対位法、そして他地域からの音楽（南ドイツやイタリア）が互いに絡み合い溶け込んでいる。シャイトもまたその流れの中にある。そしてその流れは100年後、ゆったりとバッハに辿り着くのである。

『タブラトゥラ・ノヴァ』とは何か。それは、中部ドイツの雄大な時の流れと、変化と刺激に富んだアムステルダムやイギリスの文化との結合である。そして、保守的な作風を保持しつつ、一方で社会に対して革新的であろうとしたシャイトの生き方を映し出している作品集でもある。

近代におけるシャイト研究は19世紀末に始まり、まだほんの1世紀と20年ほどが経過したに過ぎない。『タブラトゥラ・ノヴァ』をめぐる本研究により、明らかになったシャイト像は、伝統の上にはしっかり根を下ろし、その上で新しいことを為そうとした、存在感を放つ力強い像なのである。

#### (総合審査結果の要旨)

本研究は、ザムエル・シャイトのTabulatura Nova (1624) を対象とし、成立背景と個々の作品の分析を通して、とかくスウェーリンクの弟子としてその陰に隠れがちであったシャイト像に光をあてようというものである。ザムエル・シャイトはその存在は有名ではあるが、作品の詳細について認識されているとは言えず、演奏会においても取り上げられる機会は少ない。また特に、近年シャイトの自筆譜として発見されたプロッツ・タブラトゥアについては、まだほとんど研究報告がなされていない。そのような状況においての、彼女の研究の意義は決して小さくないであろう。

まず論文においては、タブラトゥラ・ノヴァを概観した後、その成立前後の他の鍵盤楽曲の状況を概観して、シャイトがタブラトゥア集出版に至った動機を推測した。その後、このタブラトゥア集に含まれる作品の分類と詳細な分析を通して、この作品集の意義について論じた。特に第3巻の典礼音楽作品における対位法技法への執着が、シャイトの根本的な価値観に基づいていることを示し、同時にそれが16世紀のモテット技法に根ざす「保守的な先駆者」としてのシャイト像を形成していることをあきらかにした。論文は全体として綿密な準備によって周到に仕上げられ、必要な参照資料や引用の情報源がすべて詳細に挙げられて検証可能になっていることは意義深い。時として、研究対象への愛着が冷静な判断を欠く傾向も認められるとはいえ、シャイトについての詳細な研究として高く評価できる。

演奏に関しては、シャイトの大曲を冒頭におき、N. ブルーンズやJ.S. バッハまでを含めて変化のあるプログラムにまとめた。レジストレーションには様々な工夫も見られ、特にJ.S. バッハのファンタジアにおいては、積極的な表現意欲をもって大きな成長を示した。しかし、全般的な演奏技術に関しては、アーティキュレーションの変化や安定したペダルの奏法などに課題を残し、また高度に理論的なシャイトの作品については、演奏の実践において、どのような表現の可能性があるか、今後さらに研究が進められることを期待する。